

2020年度コロナ禍における教育学部教科教育担当者の授業実践報告

A Report of the Classroom Practices in the Department of Education
under the COVID-19 Pandemic in AY 2020

小野賢太郎, 遠藤純, 山口豊, 小島明子, 高木史人
神原一之, 本多千明, 金子健治, 藤本勇二
酒井達哉, 生地加代, 和田垣究, 吉井美奈子, 大畑幸恵
藤井達矢, 遠藤晶, 崎山ゆかり, 村井潤, 今村一博
西山裕子, 日高俊夫, 奥村真司

ONO Kentaro, Endo Jun, YAMAGUCHI Yutaka, KOJIMA Akiko, TAKAGI Humito,
KANBARA Kazuyuki, HONDA Chiaki, KANEKO Kenji, FUJIMOTO Yuji,
SAKAI Tatsuya, IKUCHI Kayo, WADAGAKI Kiwamu, YOSHII Minako, OHATA Yukie,
FUJII Tatsuya, ENDO Aki, SAKIYAMA Yukari, MURAI Jun, IMAMURA Kazuhiro,
NISHIYAMA Hiroko, HIDAKA Toshio and OKUMURA Shinji

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第17号 2022年

2020 年度コロナ禍における教育学部教科教育担当者の授業実践報告

A Report of the Classroom Practices in the Department of Education under the COVID-19 Pandemic in AY 2020

小野賢太郎*, 遠藤純*, 山口豊*, 小島明子*, 高木史人*, 神原一之*, 本多千明*,
金子健治*, 藤本勇二*, 酒井達哉*, 生地加代*, 和田垣究*, 吉井美奈子*, 大畑幸恵*,
藤井達矢*, 遠藤晶*, 崎山ゆかり*, 村井潤*, 今村一博*, 西山裕子*, 日高俊夫*,
奥村真司**

ONO Kentaro*, Endo Jun*, YAMAGUCHI Yutaka*, KOJIMA Akiko *, TAKAGI Humito*,
KANBARA Kazuyuki*, HONDA Chiaki*, KANEKO Kenji *, FUJIMOTO Yuji*, SAKAI
Tatsuya*, IKUCHI Kayo*, WADAGAKI Kiwamu *, YOSHII Minako*, OHATA Yukie*,
FUJII Tatsuya*, ENDO Aki *, SAKIYAMA Yukari*, MURAI Jun*, IMAMURA Kazuhiro*,
NISHIYAMA Hiroko *, HIDAKA Toshio*, OKUMURA Shinji**

1 新型コロナウイルス感染症の広がりと大学における教科教育(金子)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は, 2019 年 12 月初旬に中国武漢市で第 1 例目の感染者が報告された。その後, わずか数ヶ月でパンデミックと言われるほど, 世界中に蔓延することになった。日本では, 2020 年 1 月 15 日に最初の感染者が確認された。武漢からのチャーター便による帰国者や, 香港からの客船「ダイヤモンド・プリンセス号」の乗客に感染が認められるなどするようになり, 次第にその影響は大きくなってきた。

2 月 28 日から春期休業前まで, 全国の小・中・高等学校に一斉休業が要請されて日本全体, あらゆる層に影響が及ぶようになってきた。武庫川女子大学においても, 対面による卒業式の中止, 卒業祝賀パーティーや謝恩会の中止となった。

4 月になり, 武庫川女子大学の入学式や対面によるオリエンテーションも取りやめになり, その後の授業をどのようにするか, 検討が重ねられた。授業開始日は, 何回か延期され, 5 月 6 日から前期は全面的に遠隔授業を実施する事になった。そのため, 教員は遠隔授業の方法, 内容などを 0 からつくりあげることになった。それまで, 対面授業を前提としたシラバス, 授業内容, 方法, 評価であったため, 大学教員は大いに戸惑いを感じた。

大学の方針としては, 以前より全学的に使用していた google の提供する GoogleClassroom (以下 Classroom) を用いて遠隔授業をすることになった。また, ICT ヘル

プデスクを通して遠隔授業を支援することになった。

しかし, このような状況の中で, 教科教育分野の授業をどのようにしていくかは, 大きな困難に直面した。教科指導法は, 模擬授業を行う事が多い。しかし, 遠隔授業で模擬授業を行う事はかなり難しい事である。教科内容論の授業では, 実際のものを使って実習や演習を伴いながら, 学生の理解を深めていく事が多い。しかし, 家庭にいる学生に特別な器具や教材は皆無である。一般家庭の広さでは, 体を動かす運動はほぼ無理である。

このような状況で, 教科教育担当教員が授業をどのように考え, どのような対応をしたかを各教科毎にまとめ報告し, 今後の参考にしていきたい。

2 各教科の実践報告

(1) 情報教育 (小野)

「教育と ICT」の対面授業 1 コマの授業配分は, 約 30 分の説明や講義, 残りの 60 分が個人の演習中心の時間としている。全 15 コマの内訳は, 2 回が情報倫理 (特に大学のネットワーク環境, 各種資料の著作権等の講義とレポート), 5 回が Word の操作技能と教育関連の課題, 5 回が Excel の操作技能と教育関連の課題, 3 回が PowerPoint の操作技能と教育関連の課題に割り当てている。テキスト (FOM 出版 情報リテラシー アプリ編) を 1 冊仕上げる事 (小課題が 42 回) と, 定期試験に変わる 4 つの大きな課題の提出で 2 単位の授業を構成している。

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

** 2020 年度武庫川女子大学 2021 年度文教大学 (AY2020 Mukogawa Women's University AY2021 Bunkyo University)

オンライン授業では、各時間の最初の説明・講義部分をビデオ化してオンデマンドにて学生へ授業時間の数日前に提供した。授業時間は、Meet でオンライン待機し質問等を受けた。授業時間だけで足りないため、毎週水曜日から土曜日までの昼休みに「オンラインオフィスアワー」と称して、授業者はオンラインで待機し質問等を受けた。メールでの質問は 24 時間受け付けており、学生からの質問が多い時間帯（夜中）の質問を毎朝 4 時頃～7 時頃までに返信した。学生は、スマートフォンで Meet に接続して、操作画面やキーボード等を映して指示を受けながら問題解決をしていた。

このような演習科目は、パソコン教室での対面授業を行うと、演習時間に「同じパソコン画面を見て、同じマウスやキーボードに触れる時間」が長くなり「密」を避けることができない。しかし、準備や説明に時間がかかるものの、オンライン・オンデマンド学習と非常に親和性が高いと思われる。

2020 年度、すべての授業がオンライン・オンデマンドでの対応となったため、学生は各自が準備できるパソコンでの受講となった。問題となったのは学生が準備できたパソコン環境であった。OS は Windows7, 8, 10, MacOS, そして Office 製品は、Microsoft 社の Office2010, 2013, 2016, 2019, 365, OpenOffice, LibreOffice, その他が混在した。武庫川女子大学の学生は Office365 が無償で使える契約となっているが、パソコンの仕様で使用できない場合も多く見受けられた。このため、授業者は上記のようにほとんど 24 時間体制での対応となった。

2021 年度は、大学が指定した仕様のノートパソコンを学生が各自で準備することとなった。しかし、ここでも指定した仕様と異なる OS であったり Microsoft 社以外の Office を使ったりする学生がどのクラスにも数人いたが、前年度の経験が十分に活かして対応はできた。

(2) 国語科教育 (山口, 高木, 小島, 遠藤)

国語科には 4 名の教員がいる。そこでそれぞれ担当する科目から 1 科目を選んで報告させていただく。

「日本語文法」音声付きパワーポイントをビデオ化し、オンデマンド型として Classroom に配信した。資料と課題を分けて配置し、課題の提出を持って出席とした。14 回目には考查代替問題も配信した。課題として練習問題と学習内容に関する感想を書かせた。課題の提出を 6 日後に設定したため、出席確認も遅れ、課題の確認もぎりぎりとなった。間違っている部分を指摘してやるにしてもほぼ一週間後であるので、気の抜けたものとなってしまったことが悔やまれる。また、後半の回になってから前半の回の課題を提出する者もあり、学習の系統性に疑問が残ることとなった。次年度もこの授業はオンデマンド型と指定されているので改良する余地がある。(山口)

「ことばと表現」3 年 D・E・F 組の組別の後期対面授業。施設実習、保育実習、教育実習等が後期授業期間中に変更された学生が多くいるため、Classroom も作成して、毎回の授業を録音し、ホワイトボードへの板書(写真)及び配布資料(PDF)と共にアップした。実習等で欠席した学生には Classroom の資料を聴取・読取しておけば、出席と見做す措置を取った。欠席した学生とは Classroom 及びメールでやりとりをして、資料の聴取・読取連絡を受けた。演習式の授業であったが、欠席学生が次々と変わる状況を考慮して講義を多く取り入れた。1 月に入り、絵本読み実践を行ったが、実習生も多く、Classroom 課題を平行して課した。(高木)

「日本古典文学概論」前期開講。Google Meet を使用した双方向型授業。受講者 17 名。Classroom に授業用のプリントを事前に配信しておき、各自印刷して手許に置いた上で、授業に臨ませた。基本的に講義形式であるが、授業中に学生を指名して答えさせたり、チャットで全員に短いコメントを書かせたりして、通常の双方性が保てるように努めた。毎回、その日の授業内容を考察する小課題を授業直後に Classroom の時間設定を使って配信して取り組ませ、授業当日の 23:59 までに Google フォームから提出させた。課題については、点数をつけて返却、次の回の冒頭に、学生の解答から優れた例を取り上げつつ解説を行った。また全授業終了後、最終レポートを課し、成績に反映させている。(小島)

「国語科内容論」授業をビデオにて動画撮影し、MPEG 形式に変換してアップロード、Classroom にて視聴する方法を採用した。当該授業回に使用する教材・プリント類は数日前にアップロードして目を通しておくよう指示、場合によっては事前課題も課した。動画は授業時間と同時に公開開始し、視聴期間は特に制限を設けなかった。課題は 3～4 日後の提出とした。授業動画の最初には、前回授業のフィードバックを行い、受講者によるレポートをいくつか、字幕付きで音読・紹介した。併せて、授業のテーマやねらい、この授業回で身につけること、キーワードとなる用語や言葉などは字幕を置き、視覚的にも理解できるよう工夫した。(遠藤)

(3) 社会科教育 (本多)

2020 年度は、社会科教育担当者として、「社会科内容論」(1 年後期)および「社会科教育法」(3 年前期)を遠隔授業で担当することになった。遠隔での授業実践は、初めての試みであり、どのように受講者に課題を配信すべきか、毎回の授業で四苦八苦し。コロナ禍における授業実践を振り返るに際し、受講者による授業アンケートを手掛かりとして考察したい。

受講者による「社会科内容論」の授業アンケートの自由記述欄には、授業の良い点として、「自分でワークシー

トを作ったりしてみるの楽しかった。」「学習指導要領などを調べるにより、実際に行われている授業内容を詳しく理解できた。」「自分で気になることを調べるので、主体的に取り組めると思った。」「自分で考えて指導案や教材を作るものが多かったの、とても実践的な学びになったとおもう。」「いつも系統の違う課題が出されていて、こんな風にすれば楽しんで勉強できるのだと学びました。」「ワークシートを作ったり、主体的に学べる工夫がされていた。」「実際の指導案などを見ることができ点。」「社会の中の様々な分野を学ぶことができ、新たに考えさせられることが多くあった点。」など、授業の学びを自分で主体的に取り組むことができたといった内容が、記述されていた。

「社会科内容論」および「社会科教育法」では、各教科書会社の HP に掲載されている教科書の見本や、各教科書会社のデジタル教科書の見本などを各自が確認することより、『小学校学習指導要領解説 社会編』に記載されている内容を、教科書としてどのように具現化されているのかを考察してもらった。また、NHK for school で配信されている動画（「歴史にドキリ」「社会にドキリ」など）のサイトを紹介し、自分が観たい番組を選択し、視聴した動画の感想を提出してもらった。動画を視聴する際には、『小学校学習指導要領解説 社会編』を手がかりとして、各単元でどのような学習が必要であるのかを、PowerPoint に音声を入れた動画も配信し、単に動画を視聴するだけではなく、自分が教師として子どもたちに教える際、どのような点に気を付けて指導をするときのかを考えるように促した。

授業アンケートからは、授業の改善点として、「質疑応答や意見交換等の機会が設定されていましたか？」のアンケート項目の値を、もう少し高める必要があると感じた。遠隔授業では、受講者同士の意見交換を行うことに苦慮した。毎回の遠隔授業では、できる限り、受講者から提出された質問については、コメントを付けて返却するなどして、担当者と受講者の意思疎通に努めた。受講者同士による意見交換のためには、前回の遠隔授業で提出された質問をピックアップし、次回の遠隔授業で PowerPoint の動画での紹介や、Classroom の限定コメントやメールで質問があったことを、Classroom のストリームの機能を活用して、全ての受講者に伝えるように心がけた。

受講者のアンケートからは、主体的に課題に取り組むことができた。との感想があったが、どのような課題であれば、より一層主体的に課題に取り組むことができるのか、今後とも検討したい。

(4) 算数科教育 (神原)

① 3 年前期・「算数科指導法」

Meet を活用したライブ配信の授業形態で行った。前半の理論的な学修場面では、ホワイトボードを活用しながら開設したり、学生に課題を取り組ませて発表させたりしながら、双方向性を重視した授業とした。後半の模擬授業では、6 名ずつのグループに分けて遠隔による模擬授業を実施した。小グループを 6 つ程度作ることになり、教員による観察が十分にはできなかった。しかし、以下の学生の全 15 回授業終了後の反応のように遠隔による模擬授業の効果がみられた。

- ・模擬 授業を全員が行い、それを話し合う活動ができたところ。自分が授業したすぐに振り返りができたので次に生かせるアドバイスが貰えた。本講義が 1 番授業感がありました。
- ・模擬授業のやり方を 1 人で考える時間を作ってもらえたので、授業づくりの難しさや授業を行う時にどれだけ緊張するかを知ることが出来ました。算数内容を前半の授業で行って頂けたのも振り返る時間ができて役に立ったと思いました
- ・遠隔でも実際に模擬授業ができたことが役に立ちました。他の授業では指導案は作成しても、模擬授業をする機会がなく、授業のイメージが湧かなかった。しかし、この講義で 20 分でも授業を行う体験ができ、指導案にどのようなことを書いたほうがいいのかなどの改善点が見つけられたので、すごくためになりました。
- ・この講義を受ける前は、教育実習に不安しかなかったのですが、指導案を少しずつ作成していき、模擬授業を行ったことで、少し安心しました。遠隔授業だと、対面授業よりも学べないと思っていましたが、私は学校より家で受講するほうが集中できることをこの前期で知りました。参考になる資料が多かったのもすごくよかったです。

② 1 年後期 「算数科内容論」

オンデマンドによる授業ビデオの配信を行った。正規の授業時間内は Meet を開いて質問ができる時間を設けたが、正規の時間に視聴している学生は予想以上に少なかった。毎時間後に学修内容の習得を評価する課題をさせて、最後にコメントや質問を書かせ、必要に応じてフィードバックを行った。学生によって理解度や学修の質に大きな差を感じたが、フォローのメールを送っても返信が無く手立てに困った。学生へのフォローが課題であった。

(5) 理科・生活科教育 (金子, 藤本, 酒井)

理科・生活科と範囲が広いので、「理科内容論」の授業を取り上げて報告する。2020 年度前期の全て授業が遠隔授業となり、理科教育は大きな困難に直面した。「理科内

容論」(2年前期)の授業では、実験・観察を行うことが前提である。そのためには、実験・観察の器具が必要である。しかし、家庭にそのような器具があるとは考えにくい。一方で、実験・観察の全く伴わない講義だけの授業で学生の理科の内容に対する理解が深まるとも考えにくい。そこで、「理科内容論」では、小学校で学習する内容を題材として、家庭にあるものや、近くのスーパーマーケット等で簡単に入手できるものを使って、実際にできる実験・観察を行いながら、理科の内容に対する理解を深める授業を実施した。以下にその概要を述べる。

例1 小3 音の性質

ストローで笛をつくって、実際に吹いてみる。音が出る時は、何かが振動していることや、ストローの長さによって、音の高さが変わることがわかる。

例2 小5 酸性・中性・アルカリ性

スーパーマーケットで、ブルーベリー又は紫キャベツを買ってきて、その汁を水で抽出する。抽出された液にお酢、レモン汁やパイプ用洗剤などを入れると、色が変わり、色の変化から、液体の仲間分けができる。

例3 小5 花のつくりとはたらき

身近にある花を採取して、スマホの拡大機能や100均で売っている接写レンズを使って、花の中の仕組みを観察する。花にはおしべ、めしべなどがあることが確認できる。

尚、これらの実験方法の説明は、わかりやすくするために、助手と協力してビデオを毎回作成して、視覚的にも理解できるようにした。

このような遠隔授業を行った結果、受講した学生からは概ね好評であった。

- ・対面で授業を受けられないことは残念でした。しかし、理科室ではなく、家でも楽しく理科の実験ができることを知りました。
- ・実験動画が非常に分かりやすくて、家で実験をスムーズに進めることができました。
- ・実験のたびに、今回は学習指導要領のどこにあたる部分を学ぶのかということが明確だったので、それを意識して取り組むことができました。

以上の事から、コロナ禍における遠隔授業であったが、ある程度の成果を見ることができた。しかし、制約も多いため、学習指導要領の全てを網羅できたわけではないので、今後検討していくべき課題も多い。

(6) 音楽科教育(和田垣, 生地)

本稿では、いくつかの音楽科教育の科目のうち、もっとも基礎的で音楽科教育の内容の全般に関わる「音楽科内容論」を中心に概説することにする。「音楽科内容論」は、歌唱領域・楽典(西洋音楽理論)・ソルフェージュ(音感教育のようなもの)からなっている。

さて、コロナ禍における授業実践であるが、音楽科にもその影響は少なからず押し寄せた。ピアノ指導の時はまだしも、歌唱領域が加わるや否や、「歌ってはいけない」という大学からの指示があり、啞然とした。音楽授業には歌は付き物で、その占める割合は高い。そのため、できる範囲でいくつかの工夫を試みた。

まず、授業担当者はマスクおよびフェイスシールド着用、学生も同じであった。そして、受講生全員が同時に音楽教室に入ると明らかに”密”になる(クラスによって差はあるが)。そこで、90分の授業を半分に分け、45分授業を2つ設定した。1つ目の45分は対面で行ういつもの「音楽科内容論」である(実際には縮小版)。ただし、授業時間が半分なため、通常の授業内容を削る必要があった。そのため、歌唱領域で歌う曲数を減らし、ソルフェージュは他でもある程度補えるため割愛した。楽典はどうか納まった。もう一方の45分は、別室で課題に取り組む時間である。課題には、楽典の解説や練習問題、小学校または幼稚園の授業・保育案作成、教員の立場から見た音楽紹介、作詞などであった。受講生たちは、中間45分になったら、場所を入れ替わるのである。

以上は、非常にスムーズに移動ができ、授業の進行に何ら問題はなかった。学生も概ね熱心で、前向きであり、充実した時間を過ごせたと思っている。けれども、課題が多すぎたり一部むずかしいということで、学生には取り組みにくい面もあったようだ。それに、課題についてのフィードバックがほとんどできなかったことも、学生には不満があったようだ。フィードバックの必要性は理解していたが、対面での授業は限られており、それに時間を割くと、他の内容を圧迫するため、できないまま過ぎてしまったのは反省点である。

最初、今年度のような形で授業を行うには不安があった。しかし、専任教員・非常勤講師・助手が知恵を出し合い工夫すれば乗り越えられると感じた。この先、何かあるかわからないが、1つ1つの経験を積み重ね、その際に見合った授業を展開していきたい。今回のコロナ禍での授業実践は、そのための基本となった。

(7) 図画工作科教育(藤井, 大畑)

「図画工作科指導法」は3年後期に実施する科目である。実技やグループ活動を行う科目であるが、コロナ対策として空き教室の調整のため約半分をオンデマンドで実施した。2020年度は全15回の授業のうち、オンデマンド7回、対面8回で計画した。

本科目ではまず授業1~3回目をオンデマンドで開講した。教育学科3年後期は、9月初旬に2週授業を行い、1ヶ月の教育実習の後で授業を再開する。実習は地域によって前後するため、授業1~4回目あたりは出席者がまばらであることが例年の課題であった。そこで、1~3

回目の授業内容を9月上旬に配信し、それぞれの実習の空き時間に合わせてオンデマンドで学習を進めていくこととした。

1回目の内容は授業全般の説明のあと、Formsで課題に取り組ませた。Formsでの課題は①図工の魅力や身につく力について考えを述べよ、②素敵な図工指導のために身に付けたいことは何か、という問いであった。2回目の内容はパスを用いた多様な表現方法について、制作過程を撮影して編集等を加えた動画を配信し、自宅で各々制作を行った。動画再生はおよそ履修者数になっていたが、この回は244回（履修者153人）であった。3回目の授業は、子どもの絵画の発達段階について音声付きパワーポイントで紹介し、実際に3種類の子どもの絵画を鑑賞してレポートで分析させた。

実習を終えてしばらく対面で授業実施した。造形遊びに関してグループで活動や考察を行う回や、絵のテーマについて自己分析・他己分析をしながら色や形を発想していく回があり、対面でないと行えない内容であった。その合間に大学の事情で急遽対面中止になった際には、後で実施予定だったオンデマンドを先に行うことで対応した。

授業後半のオンデマンドは、絵画の仕上げについて、図画工作科指導要領の解説（理念・構造・内容）、評価と指導計画の作成と内容の取り扱いに関する解説、鑑賞教育について、それぞれ音声付きパワーポイントで紹介した。学生には作品の完成やFormsでの回答、レポートの作成を課した。

12月末～1月の授業は、絵画の作品鑑賞と最後の課題として電動糸のこ・金槌などを使った教材作成を課す予定であったが、コロナのニュースが増え始めたため、鑑賞と道具の取り扱いを1コマ行ったあとは、自宅での制作も可とし、学生に登学を選択できる課題に切り替えた。内容は次の通りである。①立体の分野で教材開発をする、②小学5・6年を対象とする、③4～6時間相当、④家にある材料または学内で制作する人は木材や工具を使用することも可、という条件で取り組ませた。

本科目最終回はまとめとして立体の作品鑑賞とフィードバックを行った。また、授業でどんな気づきがあったかを班で意見交換し、一人一人発表した。この発表は筆者にとって一番成果が実感できるものとなった。どのクラスも気づきが表層的ではなく、それぞれが具体的に述べ、見方が多様であったからである。自分が小学生時に受けた図工指導の長所短所、図工の意義、授業でつまずく時の対処法、パスの多様な使い方、制作のテーマの多様性、地域の材料や文化を取り入れたいといった理想などが語られた。これらは、14回分の授業で触れた内容であり、オンデマンドと対面をミックスさせた授業で十分

な学びがあったと思われる。

（8）体育科教育（村井，遠藤，崎山）

2020年度体育科における授業実践として、2年前期開講の「体育科内容論」（以下、内容論）と、2年後期開講の「体育科教育法」（以下、教育法）の授業展開について報告する。

内容論と教育法の授業計画として、内容論は実技（器械運動・ボール運動領域）を実施し教材研究について学ぶ授業、教育法は模擬授業（器械運動領域）を実施し体育科教育の理論的内容について学ぶ授業として計画していた。しかし、今年度はコロナ禍に見舞われ、授業展開の大幅な変更が求められた。特に前期の内容論は実技を実施する予定であったが、器械運動やボール運動の特性上、対面授業でしか実施できなかったため、講義で学修可能な内容に変更することとした。

教育学科では内容論と教育法の両方が小学校教諭免許の必修科目に位置付けられているため、小学校免許を取得する学生は必ず両科目を履修することとなる。このことから、授業内容を再検討するにあたり、内容論と教育法の教育内容を一体のものとして捉え、前期の内容論で講義を通して学ぶ理論的内容を、後期の教育法では体験を通して学ぶ実践的内容を位置付けることとした。具体的には、内容論では体育科教育における目標・内容・方法・教師の活動・子どもの特徴・素材と教材、という項目で講義動画を配信した。また、教育法では器械運動の教材研究を実施したうえで模擬授業を行い、模擬授業の分析と教材研究の実例としてボール運動領域の実技を行った。

内容論の授業の工夫として、授業後の提出課題が挙げられる。内容論では授業後にGoogleフォームを用いて課題を提出させた。課題は大きく分けて、教科書の関連部分についてまとめる課題と、授業動画の内容を踏まえて回答する課題の二つの種類を作成した。特に、授業動画の内容を踏まえて回答する課題では、教師行動などの理由や意図を問う設問を設定し、学生が授業内容を暗記するのではなく授業内容を用いて思考するように工夫した。

教育法の授業では、コロナウイルス対策として、クラスを前半と後半の二つに分け、クラスサイズを小さくして実施した。そのため、例年、各クラスで計4回実施している模擬授業が計8回となった。前半と後半に分けたことで、時間の制約上、対面で反省会を行い情報共有することはできなかったが、Classroomを介して模擬授業の動画を共有し、授業分析課題（1. 授業動画を再生しながら改善案を書き出し、改善の優先度と改善の難易度を検討する課題／2. 授業動画を再生しながら、体育授業場面の期間記録法を実施し、授業の時間配分を分析する課

小野賢太郎, 遠藤純, 山口豊, 小島明子, 高木史人, 神原一之, 本多千明, 金子健治, 藤本勇二, 酒井達哉, 生地加代, 和田垣究, 吉井美奈子, 大畑幸恵, 藤井達矢, 遠藤晶, 崎山ゆかり, 村井潤, 今村一博, 西山裕子, 日高俊夫, 奥村真司

題)を実施することで、各自で有効な振り返りを行うことができたと思われる。なお、体育授業場面については内容論で説明していたため、内容論の授業動画を参考動画として再度配信し、内容論と教育法の連携を図った。

今年度はコロナウイルス対策として様々な工夫を行ったが、授業動画や Classroom の活用法など平時においても有効と思われる知見が多く得られた。それらを活かして、コロナウイルス収束後の授業展開を検討していきたい。

(9) 家庭科教育 (吉井)

「家庭科内容論」と「家庭科指導法」を中心に報告する。「家庭科内容論」は主に1年生向け(編入生も含む)、「家庭科指導法」は3年生向けの科目である。

「家庭科内容論」については、遠隔授業が全てオンデマンドと決定されたことから、大人数の授業に向けての工夫を検討した。受講生は1クラス90名程であった。非常勤の先生との連携をするために、非常勤の先生の Classroom にも入り、授業を共有した。「家庭科内容論」で工夫した点は、①授業の流れ(予定)を可視化し、初回に予定表を提示した。②担当教員と対面で会うことがないため、自己紹介ビデオを作成した。③最初に提示したスケジュールに沿って、課題の提出日なども前もって分かるようにした。④課外タイムを授業時間外に設け、リアルタイムでの質疑応答に対応できるようにした。授業時間外(平日の夕方から夜)に課外タイムを設置し、自由参加で交流できる時間を作ったことで、東北からゲスト等を招くことができた。完全な自由参加にもかかわらず、学生らは自ら意欲的に参加していた。課外タイムで交流のあった学生同士で、他の対面授業での交流も見られ、大学で学んでいる感覚を掴んでいた。

「家庭科指導法」については、「対面」の扱いではあったが、密になってしまうため、ハイブリッド型にして、前半の理論編はオンデマンド型、後半の模擬授業は模擬授業担当者だけを教室に登学させ、残りの生徒役である学生らは自宅か別の教室等で、PC かスマホを使って受講する形にした。こちら、第一回目に全てのスケジュールを可視化し、どのような内容で、いつ課題の提出があるかを分かるようにした。修正がある時にはストリームに掲示した。15回の内容と課題、提出日を明示したことで、学生が取り組みやすかったという前向きな意見が多く聞かれた。「家庭科内容論」は、対面でないことや1年生向けで教員と馴染みがないため、教員の紹介動画をみて、身近に感じて質問しやすかったという感想があった。

「家庭科指導法」については、実際に遠隔で授業を組み立てて実施したことで、学校現場でもこのように教員が授業を考えていたのだということを学ぶことができ、大

学の授業についても実施する側の立場も考えられるようになったという感想を聞くことができた。また、授業の終わりには記念撮影をして、最後に楽しい気持ちで終了できるように工夫した。模擬授業の準備については、一度以上吉井に相談と確認をするように指示し、グループごとに授業時間外に対面で質問を受ける時間を設けた。

課題としては、90人クラスの課題を確認したり、内容を見たりすることが大変負担だったことと、遠隔になったことで、クラス全体で答えられる簡単な質疑についても、一対一のやり取りになることで、何度も同じことを回答することも負担であった。授業時間外に準備などをすることが多く、授業関連に割く時間は確実に増えた。

(10) 英語科教育 (日高, 今村, 西山, 奥村)

主に「英語 I」「ライティング IA, IB」について報告する。

英語 I は入学したばかりの1年生に対する科目である。最も配慮したのは対面の授業と遜色のないコミュニケーションを実践することと、とにかくフィードバックを密に行うということであった。そのために、チャット機能を活用しながら簡単な問題に答えさせたり、当時はまだブレイクアウト機能がなかった Classroom においてグループ活動用のスペースを多く用意してそこでグループ活動を展開したりした。また、Google フォームを用いて毎回振り返り活動を行い、感想や質問を集約し、氏名を特定しない形で次の授業においてフィードバックを行った。さらに、遠隔授業ですべての学生たちが PC を利用していることを利用し、様々なテーマに関して調べ活動を行い、全員の情報を瞬時に共有するという、対面授業ではあまりできないことを行うことができた。以上のようなことを実践した結果、授業後のアンケートでは「フィードバックやグループ活動、意見交換の場が多く、友達との繋がりもできて孤独感をあまり感じずに授業が受けられた。知り合った友達と後期に対面できることが楽しみだ。」という趣旨の感想が多かった。

ライティング IA (2年生前期)に関しては、英作文等の課題を主に Google フォームの形で提示することによって、それまでの対面授業ではできなかった「全員の解答を表示して検討する」という活動ができたことはオンライン授業の利点として挙げられるだろう。学生たちの感想においても「みんなの解答が見られて大変参考になったし、正解が1つではないことが実感できた」というものが多かった。また、自由英作文においてもブレインストーミングの情報をみんなで共有することにより、どのように情報を収集・整理しながら全体の文章構成を考えていくかということがよく理解できたように思われる。実際、課題として提出された文章の多くが、文法上の誤り等は多少見られるものの、全体としての文章の構成や

流れは、全体として良いものであったと感じられた。

以上を踏まえつつ、後期のライティング IB においては、遠隔授業で得た利点（フィードバックの方法や学生の解答の集約・整理、一斉の調べ学習等）を対面授業に生かすことができたのは望外の成果であったと思われる。ただ、授業準備や事後の作業量は従来の対面の頃に比べて大きく増加したのは確かであるので、今後さらに活動を整理していくことにより、教員の負担を減らしつつも効果を高めることが課題となるであろう。

3 担当教員の意識調査結果及び各教科の実践のまとめ、(金子)

担当教員の遠隔授業についての意識調査を行った。その結果を以下に述べる。

- ① 実施時期 2020 年 2 月
- ② 調査対象 教科教員担当教員 21 名
- ③ 回答者数 15 名
- ④ 質問項目 質問項目は、以下の 8 項目である。

質問 1 自分の行ったオンライン授業にあなたは満足していますか。

質問 2 オンライン授業で担当している授業の目標は達成できたと思いますか。

質問 3 オンライン授業を行う上で困難を感じた時にどのような方法で解決しようと思いましたか。

と感じますか。

質問 4 オンライン授業を実施するときに、困難を感じる原因はなんでしたか。

質問 5 オンライン授業を実施することで教員の負担は増えたと感じますか。

質問 6 オンライン授業に対して 学生は意欲的に取り組もうとしていると感じましたか

質問 7 今後、コロナ禍が解決した後にオンライン授業を継続する必要があると感じますか。

質問 8 オンライン授業についてあなたの感想を自由に書いてください

質問 1, 2, 5, 6, 7 は、4 件法で調査を行った。質問 3 は、複数回答可として、本や雑誌などを頼りに自分で解決した、インターネット上の情報を自分で調べて解決した、同僚や友人のアドバイスで解決した、ICT ヘルプデスクのアドバイスで解決した、解決できなかった、その他 の選択肢の中から選んでもらった。質問 4 も複数回答可として、コンピュータなどの機材がなかった、コンピュータはもっていても、コンピュータ自身のスペックが不足していた、自宅などのインターネット環境がなかった、自宅などのインターネット環境はあったが、その回線速度が不足していた、自分の ICT 関係の知識や経験が不足していた、その他 の選択肢の中から選んでもらった。質問 8 は自由記述で回答してもらった。調査

結果から、特徴的なものを以下に述べる。

図 1 に質問 1 の調査結果を示す。

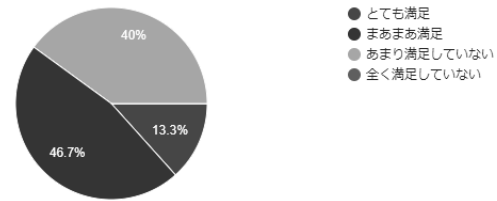


図 1 自分の行ったオンライン授業に満足しているかどうかの調査結果

図 1 から、60%以上の教員が自分の行ったオンライン授業に満足していることがわかる。一方、40%の教員は満足していない。満足していない教員が少ないとは言えない。

図 2 に質問 2 の調査結果を示す。

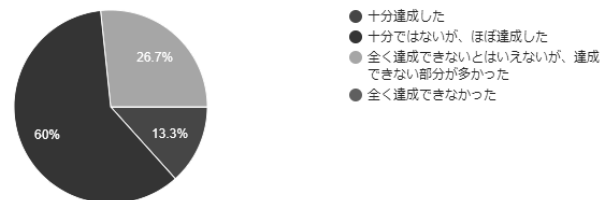


図 2 オンライン授業で担当した授業の目標は達成できたかどうかの調査結果

図 2 から、73%の教員が達成できたと考えていることがわかる。一方で、26%の教員は達成できない事が多かったと感じている。

質問 3 の調査結果を図 3 に示す。

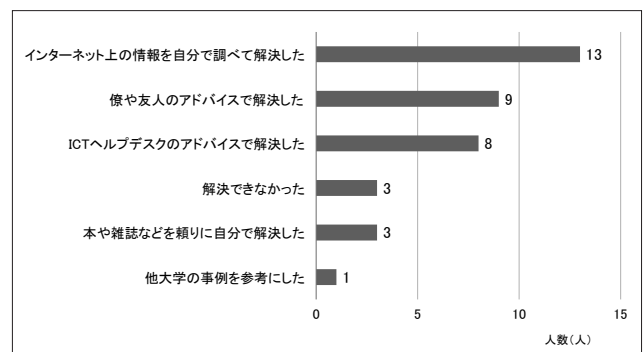


図 3 オンライン授業を実施するときに感じた困難の解決方法

図 3 から、多くの場合、インターネット上の情報や、周囲の人のアドバイスにより解決していることがわかる。それに次いで、ICT ヘルプデスクのアドバイスも大きな助けとなっていることがわかる。

小野 賢太郎, 遠藤 純, 山口 豊, 小島 明子, 高木 史人, 神原 一之, 本多 千明, 金子 健治, 藤本 勇二, 酒井 達哉, 生地 加代, 和田垣 究, 吉井 美奈子, 大畑 幸恵, 藤井 達矢, 遠藤 晶, 崎山 ゆかり, 村井 潤, 今村 一博, 西山 裕子, 日高 俊夫, 奥村 真司

質問 4 の調査結果を図 4 に示す。

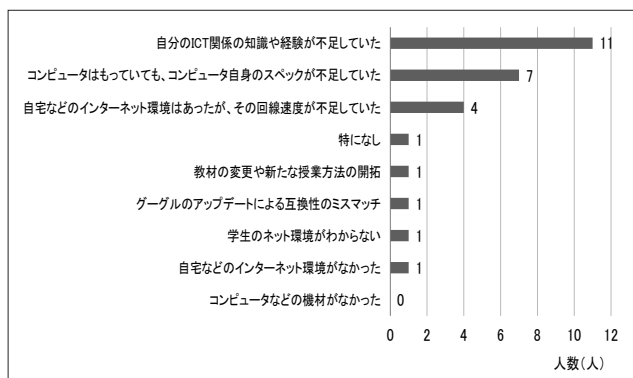


図 4 オンライン授業を実施する時の困難の原因の調査結果

図 4 から、コンピュータや ICT 関係の知識不足、コンピュータは持っていてもスペック不足、自宅のインターネット環境の不足が多くをしめている事がわかる。突然オンライン授業をせざるを得なくなったが、実施するための研修、コンピュータや自宅の回線速度の確保などについても、大学からの支援が必要であった事がわかる。

質問 5 の調査結果を図 5 に示す。

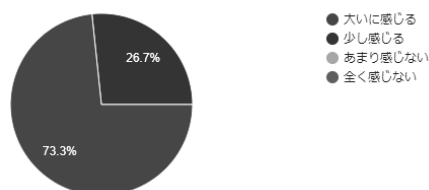


図 5 オンライン授業による教員の負担は増えたと感じるかどうかの調査結果

図 5 から、全ての教員が少なからず負担感が増していることがわかる。

質問 6 の調査結果を図 6 に示す。

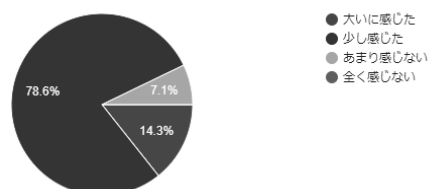


図 6 オンライン授業に学生は意欲的に取り組もうとしていると感じたかどうかの調査結果

図 6 から多くの学生がオンライン授業に意欲的に取り組もうとしていると、教員も感じていることがわかる。

質問 7 の調査結果を図 7 に示す。

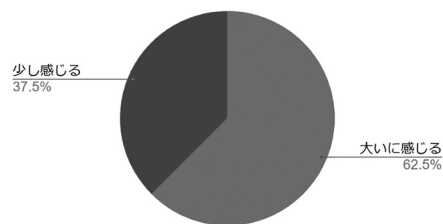


図 7 コロナ禍が解消した後に、オンライン授業を継続する必要があると感じるかどうかについての調査結果

図 7 から今後もオンライン授業を続ける必要があると考えている教員が殆どであった。

質問 8 の調査結果をいくつか紹介する。

- ・学生が自分のペースで学習に取り組むことができること、また、学習において個人化が進む点において、オンライン授業のメリットは大きい。コロナ禍が収束しても、対面授業にあわせてオンライン授業を取り入れることがあってもよい。
- ・実技授業を担当する立場としては、オンラインでの交流に新たな活路を感じる以上に、対面での相互交流の意義をさらに実感することとなった。
- ・対面授業以上にフィードバックが大変だったなあというのが正直な感想です。あと、やはり評価の面で試験がしにくいということ重大な問題ではないか。今回、試験をせずにいかに評価するかということを考えるいい機会にはなったので、コロナが収束した後の新たな評価の仕方に対するヒントにはなった。

質問 8 の結果から、教員にとっても初めての体験であり、多くの困難に直面した。しかし、今回の経験を前向きにとらえ、これからの教科教育について考え、進み始めるという動きも見られた。

このような調査結果や経験を踏まえて、以下の事をまとめとしておきたい。

- ・オンライン授業は、メリット、デメリットの両方がある。教科の特性や内容によって、向くものと向かないものがある。

- ・オンライン授業で行う評価やフィードバックの方法については、さらに検討の余地がある。対面の時のような試験を実施する事が困難な場合に、どのような評価方法を行うかはまだ定まっていない。

- ・今後、パンデミックが収束したとしても、部分的にオンライン授業が行われる可能性はある。

私たちが今回経験した事を記録に残す事により、将来起きる可能性のある事態に貢献できればと願っている。